

なからぎ

162号

2003年1月

人生を決める、そんな一冊に出会って欲しい！

教務部長 大西正健

かれこれもう25年以上も昔の話である。米国アイオワ州立大学で過ごした研究生生活はきわめて感動の日々であった。ちょうどいまごろ、年末から年始に、20mはあるだろうか。樅の大樹にクリスマス電飾が一齐に点灯されて、ダイヤモンドダストが夜風に舞うキャンパスの一隅に院学生や教職員が集い賛美歌と思しき歌声のなか、酷寒にもかかわらず、美しさと感動のひと時に我を忘れた。学長官舎の電飾樹も見ごたえがあったし、この時期、大学の町いたるところ、電飾を堪能できた。もちろん、クリスマス電飾のみならず、学期初めのフロートやパレードの華やぎ、フットボール対校戦の盛り上がり、留学生による食の祭典、親族がこぞって参加する卒業式など、大学とその町を覆い尽くす感動の渦に飲み込まれてしまいそうであった。こんなキャンパス生活を送ることのできるアイオワの院学生をたいへんうらやましいと思った。

これに比べて本学、のみならず日本のほとんどの大学では、キャンパス生活があまりにも平穩に過ぎてゆくように思われる。激しく心揺さぶるようなことをしてあげられなくて、何か申し訳ないような気もする。

キャンパス生活がもちろん楽しいことばかりでは決してない。学習とか勉学のほうもまた、平穩に過ぎてゆくと言うわけではなく、並外れて激しいと感じられた。まるで高校3年と大学4年の7年分を大学4年間で修得しようとするかのようなようであった。予習と復習はもちろん、授業で課せられる課題の解決とレポート(定められたテーマについて、学生、教員、院生の前で発表すること)の準備などなど。顔は引きつり、必死の形相で取り組まなければならない。このためか、図書館は24時間の開館であった。夕食後図書館へ出かける院学生も多く、夜を徹して学習に励む所為か、読書資料室は連日深夜から朝にかけても熱気に溢れていた。1学期は3ヶ月で同じ授業が週に2度開講されていた。万一、教員が学会出張とかで講義が休みになると、その分は正規の授業の前かまたは後に必ず開講されたから、早朝7時からとか夜9時からの授業と言うのも珍しくはなかった。つまり、一日中学習漬けと言った感じである。学生のプロ、面目躍如と言ったところである。

本学図書館でも夜間の開館が実施されて、必死に読書・学習とか調べ物する院学生諸君の姿を見ること多い。なぜかほっとする瞬間である。院学生には、やはり本が似合うのである。

淳一も書いているように、意欲的に、ぐいぐいと読みつづけるには力(エネルギー)を要する。その力がある、いまのうちに、濫読でもよい、たくさんの本に出会って欲しい。

たとえば、IT時代真っ只中と言われようとも、本を読む、この基本は変わらない。そして、生涯を決定するほどの一冊に出会って欲しい。

(おおにしまさたけ：農学研究科教授)

文字情報から学びとる学力

図書館運営委員 松原 斎樹

本とは、文字情報が中心のものである。絵や写真のたくさん載った本もあるが、私は本とはやはり文字情報が中心のものだと思っている。少なくとも、大学での学問に重要な役割を果たすのは、文字中心の紙でできた「本」ではないか、と思う。

近年、「本」に関連して、いろいろな変化が見られるが、大学での学問・教育という視点から、私見を述べてみたい。

新しいメディアによるコンパクト化

最近、CD-ROMやDVDなどのメディアを使用した出版物も少しずつ増えてきて、古典的な本の時代は終焉するかのような観測も聞かれる。空間欠乏症で収納場所にも事欠いている本学教員にとっては、とりわけこれらのメディアに期待するところは大だろう。私自身も収納という点ではその通りだ。学会の分厚い予稿集や論文集などは、できるだけコンパクトに収納できるに越したことはない。小生の所属するある学会も、昨年から大会の予稿集をCD-ROM化して、それまで12分冊として配布されていた数千題の予稿が、2枚のCD-ROMに納まってしまった。また、何十巻もの分厚い百科事典が、わずか1枚のDVDに納められることは驚きでさえある。広い収納スペースを占有する本がコンパクトになること自体は歓迎である。それは、これらが、必要なときだけ情報を引き出せればよいものだからである。

文字情報から対象を思い描く想像力

しかし、こと通常の「本」に関しては、私はかなり保守的に考えている。文字中心の紙の本からどれだけの情報を収集しうるか、あるいはどれだけの示唆を得ることができるか、

がその人の能力のバロメーターではないか、と思っているからである。

文字情報あるいは言葉の情報からどれだけのことを思い描けるか、という想像力は、人間の能力として重要なものだと思う。人間が知能をいかに発達させてきたか、あるいは学問というものがどのように発展してきたか、ということとも密接に関連している。条件反射の研究で有名なパプロフが第2信号系と呼んだ「言語」は、人間が知能を発達させる上で、非常に重要な役割を果たしてきたのだ。

苦勞せずに学べる教材の普及

一方、文字や数式などが中心で、図や写真の少ない本を読むのは苦痛であるという意識は、若い世代ほど強まっているように思う。最近では、小学生が分数や小数を学ぶためのビデオ教材なども多く出回っており、面白おかしく学べるような環境が整いつつあるようである。子供がコメディ調のビデオを見て、算数の学習をするのを見ていると、うらやましいような、しかし、これはどこか間違っているような気がするの、私が単に歳をとってきたせいなのだろうか。

また、パソコンソフトの使い方のビデオも出回っている。できるだけ苦勞をしないで、楽しく学べるに越したことはないというのは当然かも知れない。しかし、このような教材が出回っているのも、それを作成しても大量に売れ、儲かるからであって、あまり多くの需要が見込めないような教材は誰も作らないだろう。

教材としての本と大学の学問

大学の学問とは、それほど多数の需要の見込めない細分化された分野が中心だと思う。もちろん、教養教育科目や、専門科目でも非常

に需要の多い分野であれば、営利目的で先述のような面白おかしい教材を作成する業者も登場するかも知れない。しかし、大学ならではの各自のユニークなテーマを見つけて学ぼうとしたとき、そのような教材を期待することはまず無理である。奇妙な研究者が、後進のためにそのような努力をされることもあるかも知れないが、まあ、希だろう。

学ぶためには、それなりの努力を要する本や論文しか存在しないというのが、ある程度以上のレベルの学問の常識だと思う。そういう学問対象に対して臆することなく進んでいく意欲と能力を持っていることは、大学で学問をする上ではとりわけ重要な条件である。

VRの技術、その意義と限界

仮想現実 (virtual reality) の技術もますます発展している。書物の中では文字だけで伝えられていた情報が、いわば五感を通して感じられるような技術である。古くは航空機のパイロットの操縦訓練に用いられた飛行シミュレーターが、この走りであろう。このような技術には多くの期待が寄せられており、とりわけ、コストの大幅な削減が強調されている。たとえば、そのような体験を可能にする時間とコストの削減などである。私自身は、住環境の心理的な評価を研究テーマとしているので、五感でいかに環境を感じるかは、重要な関心事である。

しかし、ここで再度、強調したいのは、常にそのような仮想現実的な情報を与えることができるかと言うことである。やはり、文字や言葉だけでしか伝えられないこともあるだろうと思う。そういう場合にどれだけ、想像力を働かせることができるかは、重要な能力だと思う。

大学における授業改善

本学を含めて、多くの大学で、授業改善について様々な議論・取り組みが行われている。授業改善の努力は当然必要だが、労せず学べるような授業を行うことがよいのか、あるいは多少の困難は克服して学ぼうという意欲を

育てることがよいのか、一体どちらが大切なのであろうか。

やわらかい消化のよい食べ物ばかり食べていると、消化力が弱くなるように、勉学に置いても、労せず知識を吸収できるような方法ばかり用いていると、学び取る力が低下するように思う。歯ごたえのある食物を咀嚼する能力、消化の良くない食物を消化する能力を身につけることは、より健康に生きていくのに重要だと思う。

そういうことを考えると、文字情報が中心の一見難しそうな本や論文から(もちろん、理系であれば、ある程度の図表は当然含むが)、多くの真実を学び取るような意欲・能力はくくむことの方が大切なのではないか、と思えてくる。

学力という視点

これは、学生の質、大学のレベルという問題とも関連していると思う(その表現には問題があるかも知れないが、敢えて用いることをお許し願いたい)。「競争的環境」という言葉を無原則に肯定するわけではないが、各大学を巣立つ学生の学力が大学のレベルの指標として問題になることは避けられないだろう。本学がどの程度の意欲・能力を持つ学生を育てる大学をめざすのか、を考える上で、文字中心の本を読みこなす意欲・能力をどう位置づけるか、はとりわけ重要な問題だと思う。

私の講義では、毎時間数冊の本を回覧して、半期で30~40冊の本を紹介することにして、これは受講生の学力を高めるためのささやかな努力のつもりである。それほど多くはないが、「あの本は読みました。面白かったです。」などと言われるとうれしい。そんな学生が増えることを期待したい。

(まつばら なおき：人間環境学部教授)



『熱河日記～朝鮮知識人の中国紀行～』1、2

朴趾源著、今村与志雄訳、平凡社刊 東洋文庫 325、328

文学部国際文化学科 中 純 夫

『熱河日記』は1780年、乾隆帝70歳の寿を祝賀するため北京へ派遣された使節に朴趾源が随行した際の日記です。書名は、使節の旅程が北京から清朝皇帝の避暑山荘のある熱河にまで及んだことに由来します。この書物をひもといてまず目につくのは、日記冒頭に後三庚子という紀年を用いていることです。1780年は乾隆45年ですが、明王朝最後の天子であった毅宗の元号である崇禎年間以降では、3度目の庚子に当たります。つまり後三庚子とは、崇禎後三庚子の意味です。朝鮮は中国を憚って独自の元号を持たず、中国の元号を用いて紀年とするのが通例ですが、ここでは乾隆45年と記すことをいさぎよしとせず、崇禎153年とでも称すべき気持を込めて、後三庚子と表記したわけです。

中国大陸と地続きであった朝鮮半島は古来、中国の直接の軍事的脅威にさらされ、従って漢民族至上主義の中華思想をも、自らの価値観として受け入れざるを得ない状況にありました。中華思想に照らす限り、朝鮮や日本は東夷(東方の野蛮な異民族)に過ぎません。朝鮮人士は東夷としての位置づけに甘んじながら、中華文明を摂取体得し朝鮮を中華文明と同化することによって、自らの存立の拠り所を求めようとしたのです。ところがやがて中国では、漢民族の明朝が女真族の清朝にとって替わられるという大事件が起こりました。明朝は朝鮮という国号を賜った宗主国でもあり、秀吉の朝鮮出兵に際して援軍を差し向けてくれた大恩ある国。その明朝がこともあろうに蔑むべき異民族によって滅ぼされてしまった。かくして朝鮮人士には強烈な尊明排清の感情が植え付けられることとなります。そして大中華(=明王朝)が滅んでしまった今や、中華文明はわが東方にこそその命脈を保っているのだ、という小中華思想が朝鮮人士を支える矜持となっていくます。後三庚子にも当然、そのようなメンタリティを読みとることができるわけです。ただし朴趾源は、異民族支配下にある今の中国からは学ぶべきもの等は何もない、といった偏狭な小中華思想は脱却克服し、清朝の優れた文物制度を摂取する必要性を強調してもいます。彼が実学派の代表的人物とされる所以です。

私の専門は中国思想史ですがここ数年来、朝鮮儒教史にも手を染めつつあります。まだまだ朝鮮学初心者マークの私にとって、『熱河日記』は李朝時代の朝鮮人士の多様なメンタリティを実感する好個の入門書でした。



『熱河日記 2』
平凡社刊 東洋文庫 328
71頁掲載図版
「避暑山荘 烟雨楼付近」

利用者の声

古き先人に会う旅

- 図書館の楽しみ -

勝又 昌代

私は古い時代に書かれた自然科学の本が好きである。そこには未知のものに対する探求心とそれを導く個人の哲学が生き生きと描かれているように感じる。現在のように応用科学に主眼が置かれるようになる以前、あるいは自然現象の多くが謎に包まれていた時代に、自然科学の先人達は何に驚き、何に着目し、そして何を見出したのかを知ることは、情報過多の現代において失われつつある“考える愉しみ”を当時に戻って共有させてくれる。ものを考える愉しみはある意味において個人の世界観をどこまで広げることができるかに繋がる。身の回りに散在する個別の事象がどのように関連して一つの“世界”を創っているのか。古き先人達は、その時代の趨勢にもまれながらあらゆる試行錯誤を時に楽しみ、時に苦しみ、現代科学の基礎を築いてきた。この事実は時代に流されやすい(もちろん自身も含めた)現代人に自己責任において志を保つ事の潔さを示してくれる。

大学の図書館は、このような今は亡き先人達の“気骨”に会うことができる本を多く所蔵しており、(京府大においては決して多い方とは言えないが)特に絶版となり、一般には入手しにくくなってしまった本にふれることができる。

また学生であれば自由に出入りできるし、お金もかからない。このことは、テレビや雑誌で最新の流行を知ることとはまた別の豊かさをもたらしてくれるように感じている。いつでも読める本は町の図書館でも十分事足りるであろうが、私の大学での図書館利用の楽しみの一つは、そこでしか巡り会うことができない学問の師達との出会いである。時には忙しい日常を離れ、書物に流れる悠久の時間を旅することも楽しいものである。

また、人間の歴史(例えそれが個人史であったとしても)は未来への教訓を多く記しており、温故知新の言われもまさにここにあるのだと思う。学問は情報のみによって完成されるものではなく、それを導く哲学がなければならぬ。個人の思想と日常が融合していた頃の生き様を学ぶことは哲学とは何かを学ぶことでもあるのだと思う。

(かつまた まさよ：森林生態学研究室

博士前期課程1回生)

新春雑感

今年は未歳で、干支は「癸未(ミズノトヒツジ)」…。暦の話はとても複雑で手に負えないテーマの為、さておいて、「ひつじ」のイメージと言えば、真っ白でふわふわの暖かい巻き毛とか、緑の牧場に憩う羊の群れといったもので、一般的に穏やかです。また、ジンギスカン鍋やマトンの焼き肉料理を思い浮かべたり、或いは、今は季節はずれですが、睡蓮の花を連想する人がいるかも知れませんね。さて、「ひつじ」を漢字にすると当然「未」または「羊」となり、中国の暦法を受容した時以来使われてきたと思われます。ところで、両者の繋がりがって何なんでしょう。まず「未」は木に横棒を加えることによって草木の枝や葉が茂り、やがて果実の成熟に至ることを象っているのだそうです。そういえば「魅」「味」等には、人に興味を抱かせ、喜ばせる力を感じます。次に「羊」ですが、パソコンの文字パレット検索の結果をみますと、「祥」「美」「養」「善」「翔」「義」など、見るからに結構そうな漢字をとり揃えています。やはり、めでたい意味を表しているのでしょうか。もっとも「遯(おそい)」「苜(さまよう)」「痒(かゆい)」「昧(くらい)」など、はた迷惑なものいくつか見受けられます。ちなみに、羊へんでは172件、未へんでは47件の漢字が並びましたが、そのうち、まともに読めるのは、残念ながら、2割有るか無しかです。しかし、何とかわかるいくつかの漢字をヒントに、無理して出したその答えは、ズバリ「美味」。正解や如何。

新しい年が、せめて飢えることのない幸多い年でありますように！ (迷える子羊)

参考文献 『十二支攷』前尾繁三郎著 思文閣出版 2000

『日本史小百科5：暦』広瀬秀雄著 近藤出版社 1987

行事予定

1 月

○ 6日(月)～7日(火) (冬期休業)

開館時間:午前9時～午後4時45分

○ 8日(水)～31日(金) 通常開館

開館時間:午前9時～午後8時

9日(木) 冬休み長期貸出終了日

10日(金)～24日(金) 通常貸出実施

〔(貸出冊数 3冊以内)
(返却期限 2週間以内)〕

13日(月) 休館 (成人の日)

14日(火)

冬休み長期貸出図書返却期限

27日(月)～3月19日(水)

春休み長期貸出実施

〔(貸出冊数 6冊以内)
(返却期限 卒業生3月17日(月)
在校生4月14日(月))〕

2 月

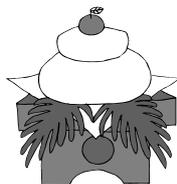
○ 3日(月)～7日(金) 通常開館

開館時間:午前9時～午後8時

○ 10日(月)～28日(金) (春期休業)

開館時間:午前9時～午後4時45分

○ 11日(火) 休館 (建国記念の日)



3 月

○ 3日(月)～19日(水) (春期休業)

開館時間:午前9時～午後4時45分

○ 19日(水) 春休み長期貸出終了日

○ 20日(木)～31日(月) 閲覧室休室

〔期間中は図書の閲覧・貸出、文献
複写依頼等の業務を休止します。
3階の各室は午後4時45分まで
利用できます。〕

〔(受付:2階閲覧室カウンター)〕

○ 21日(金) 休館 (春分の日)

4月1日(火)から開室

開館時間:午前9時～午後4時45分

休室中の図書の返却は、図書館1階西側の職員専用入口横にある「返却ポスト」もご利用ください。